

書評

村田雄二郎編『『婦女雑誌』から見る近代中国女性』（研文出版、2005年）

黄慕蓉

本書は、近代中国における女性向け雑誌の一つ『婦女雑誌』についての研究論文集である。『婦女雑誌』は中国近代における唯一の女性向け雑誌ではなかったが、刊行期間は17年間に及び、当時だけではなく、中国社会に長く大きな影響をもたらした代表的な女性雑誌とはいえよう。本書は10年前に出版された著作である。この10年の間に『婦女雑誌』についての研究はさらに進んでいるが、本書は『婦女雑誌』という雑誌の研究にとっただけではなく、近代中国女性の地位と女性解放についての研究にとっでも価値があると評者は考えている。それゆえこの10年前の著作を取り上げることとした。

本稿では、まず『婦女雑誌』の歴史と本書の構成について紹介しておきたい。近代中国の知識人は日本と西洋の新思潮の影響を受けて、女性解放の必要性を意識した。商務印書館は1915年から『婦女雑誌』を刊行し始めた。17年の刊行期間に渡って、『婦女雑誌』はいつも読者の希望に応じて読者が関心を持っていることについて紹介し続けた。それだけではなく、『婦女雑誌』は他の雑誌と同様に、編集者の立場から女性問題を論じる場にもなった。商務印書館は『婦女雑誌』を創刊したが、編集長の交替など執筆陣営の管理に責任を負うだけであった。編集長の変更は雑誌の主旨の変更を引き起こしたが、『婦女雑誌』が科学的に女性に関する知識を読者たちに紹介することは変わらず、停刊まで続いていたのである。『婦女雑誌』にはさまざまな欄が開設されていた。これらの欄を使って、執筆者たちは日本と西洋の先進的な思想と知識を中国民衆に宣伝することができた。

本書の内容は5つの部分によって構成される。ここで、本書の目次を紹介しておきたい。

序論 (村田雄二郎『『婦女雑誌』から見る近代中国女性』)

I 女性の模索 (①陳延湊「女性に語りかける雑誌、女性を語り合う雑誌——『婦女雑誌』17年略史」、②岩間一弘「家庭・職業・革命——両大戦間の中国における都市中間層の女性をめぐる」、③遊鑑明「『婦女雑誌』から近代家政知識の構築を見る——食・衣・住を例として」)

II 文学と美術 (①胡曉真「文苑・多羅・華蔓——王蘊章主編時期(1915-1920)の『婦女雑誌』における「女性文学」という観念とその実践」、②徐虹「『婦女雑誌』と20世紀前期の女性美術」)

III セクシュアリティ (①呂芳上「個人の選択か、国家の政策か：近代中国産児調節運動の展開——サンガー夫人の訪中及び『婦女雑誌』の産児調節特集より」、②張哲嘉「医事衛生顧問について」、③姚毅「「被害者」というレトリック——『婦女雑誌』の娼婦像」)

IV ジェンダー (①江勇振「男性は「人」、女性は「他者」——『婦女雑誌』におけるジェンダー論」、②許慧琦「『婦女雑誌』からみる自由離婚の思想とその実践——ジェンダー論の視点から」、③須藤瑞代「『婦女雑誌』と日本女性——近代東アジアにおける「同じ女」の意味とは」)

V メディア (①池賢淑「『婦女雑誌』からみる子供の言説——日本植民地時代の朝鮮の女性雑誌『新女性』との比較から」、②前山加奈子「女性定期刊行物全体から見た『婦女雑誌』——近現代中国のジェンダー文化を考える一助として」)

あとがき (村田雄二郎)

村田によると、その内容から『婦女雑誌』には四つの特徴が見られる。「第一に、1915-1931年までの全発行期間にわたり、雑誌の性格に変化した部分と変化していない部分があることである。第二に、『婦女雑誌』読者は当然女性のみと思われがちであるが、実際には非常に多くの男性読者がおり、また編集者・執筆者にいたっては男性が多数を占める傾向すらあったことが指摘できる。第三に、『婦女雑誌』自体が表現の場となっていた点である。第四に、「女性」の国際性である」(12-13頁)。

全体の構成から見れば、本書は『婦女雑誌』についての研究論文集である。

『婦女雑誌』のさまざまな方面を取り上げ、そこから1920—1930年代の中国における女性が置かれた社会と女性自身の状況を考察する。そこで、二つの問題点も現れた。

一つ目は、『婦女雑誌』は女性向けの雑誌なのに、男性が主導権を握っていたことである。『婦女雑誌』は近代中国の女性運動の研究に対して非常に貴重な資料である。長い刊行期間、刊行された内容の多様性、読者からの高い評価によって、民国時期の女性問題を議論する際に、『婦女雑誌』は不可欠な参考資料であるに違いないだろう。しかし、ここで注意すべきなのは、男性により刊行された雑誌として、『婦女雑誌』の紙面から女性の肉声あまり出てこなかった点である。それに、男性執筆者は女性執筆者より多かっただけではなく、男性読者も少なくなかった。

女性問題を解決するための女性向け雑誌であるにもかかわらず、『婦女雑誌』ではなぜ男性が主導権を握るのだろうか。中国で女性解放を主張し始めたのは梁啓超であった。その後を引きついで、男性の女性論者が活躍してきたのである。これら男性の女性論者は女性解放を国家の未来と関連させ、手段とみなし、女性自身の解放を目的とする意識が弱い。それに、女性による解放運動も、「国家との関連を重視する」という観念から脱出することができなかったのである。

遊鑑明の『『婦女雑誌』から近代家政知識の構築を見る』を例としてみれば、『婦女雑誌』の執筆者の多くは男性で、当時の編集者たちは「科学的」な方法で丁寧に家政知識を読者たちに紹介することを非常に重視していた。五四運動の影響で、「科学と民主」という思想が主流になった。これら知識人たちは積極的に、民衆が関心を持っている「家政」を「科学」と結び付けていたのである。

しかしながら、深く考えてみると、彼らは女性を論述の客体として取り上げていたのにすぎないのではないだろうか。もともと女性、特に家庭主婦と関わる家政知識を男性によって宣伝し説明していくことはおかしくないだろうか。家政知識について紹介し議論する執筆者の中に、女性執筆者が増えて主導的な地位につけば、女性は客体ではなく、主体になることができる。そのためには、女性自身による自己開発と自己解放が必要である。女性自身か

ら「権利」、「解放」、「平等」などを要求するようになることが、近代中国における女性運動のあるべき姿である。

遊鑑明は、「この雑誌は、家政学の補助教材としては相当の貢献をしたと考えられる。科学、衛生、経済の観念の伝播についても、この雑誌は相当影響を与えたであろう。しかし、女性読者はみな近代家政知識を受け入れられたのだろうか。あるいは、「革新家庭」では家政の主導権を握れたのであろうか。これらの問題についてはさらなる議論が必要であろう」とする（96頁）。『婦女雑誌』は確かに女性問題を解決するために創刊されていたが、その発展過程と果たした役割から見れば、創刊当初の狙いとは違った傾向がある。

もう一つは、執筆者たちが懸命に紹介した新知識と新思想はどれほど読者たちに受容されたかという問題である。さらに張哲嘉『「医事衛生顧問」について』を例として見てみよう。この論文は五四新文化時期の中国における西洋医学と伝統中医との相違点を取り上げ、読者が『婦女雑誌』の伝える医学知識をどのように受け入れていたかを明らかにすることを目的とし、「医事衛生顧問」コーナーを分析している。このコーナーは当時の民衆が関心を持っている医事問題を取り上げ、伝統医学ではなく、西洋医学で解決した方が科学的なやり方だと主張する。その時の中国は「科学的」なものに対して非常に関心を持ち、重視していたのである。医療問題は民衆の命と関わっている大事なことであるため、このコーナーは担当者を問わず、大人気をはくした。

しかし、「医事衛生顧問」コーナーは積極的に西洋医学を宣伝し、伝統中医を批判したのだが、読者たちの反応から見れば、それは成功したとは言えない。固有観念を深く持っている中国の患者にとっては、伝統中医が一番目の選択である。それに、西洋医学に対して、自分の判断力がない読者がたくさんいる。この論文では、特に読者側の投書に着目し、「医事衛生顧問」というコーナーが果たした役割は、期待より低かったと指摘する。

張哲嘉によると、「本来「医事衛生顧問」は『婦女雑誌』が定期的に科学知識を先導するもう一つの戦場として、読者が直接関心を持っている医学問題を切り口に、更なる啓蒙的効果を果たすべく設けられたものの、実際には医師にその効果の限界を確認させたただけだった」（209頁）。そういう複雑性・矛盾性は、『婦女雑誌』が刊行された17年間において、一貫して存在してい

たものだとも言えよう。

『婦女雑誌』は女性向けの雑誌なのに、男性が主導権を握っていたのだから一つ目の特徴は、本書の全部の論文の分析の前提となっているが、『婦女雑誌』の読者と執筆者の間にずれがあるという二つ目の特徴は、一部の論文しか具体的に取り上げていない。10年前の研究水準においては、執筆者と読者の関係、あるいは読者についての分析が弱いことがわかる。

この問題を考える上で、例えば、劉方（『『婦女雑誌』女性観研究』吉林大学博士論文、2012）の次のような指摘が重要だと評者は考えている。すなわち①近代中国における女性は経済的な抑圧に反抗するだけではなく、男性からの抑圧にも反抗しなければならないため、彼女たちの「自由への道」は男性労働者より一層困難であること。②男性による女性解放思想は、男性中心思想に基づいて建てられたものに違はなく、当時のジェンダーをめぐる議論には自然に男権の強さが現れること。1920年代における女性問題を巡る激しい論争の中で、新文化運動を代表する人物、例えば魯迅、周建人などが言論の主導権を握っていた。これら男性知識人たちは、女性を封建体制の抑圧から解放する必要性を意識したが、彼ら自身は封建的な男性中心思想に影響されていることに気付いていなかった（劉はそれを「新男権主義」と呼ぶ）。そのため、彼らが女権思想を宣伝する時、どうしても「新男権主義」の影響を受けることを免れなかったのである。

劉のいう「新男権主義」はその時代の産物とは言えるが、『婦女雑誌』の読者や執筆者の中から、この「新男権主義」を克服する可能性は現れなかったのであろう。『婦女雑誌』の執筆者と読者の間にずれがあるという特徴を研究し、読者自身のありようを分析する時に、ジェンダー学が明らかにした当時の中国社会のもつ特質を重視する視点が当然、必要になる。

【付記】本書に対しては、以下の書評が発表されている（著者の50音順）。

- (1) 白水紀子『近きに在りて』48、2005年
- (2) 代田智明『中国研究月報』59-9、2005年
- (3) 羽田朝子『人間文化研究科年報』21、2006年
- (4) 濱田麻矢『現代中国』80、2006年

(5) 藤井敦子『中国女性史研究』15、2006年